髙森美由紀　小説家

八戸ブックセンター様、5周年、誠におめでとうございます。

御センターに初めて入った時うろたえたのを覚えています。

高い天井が清々しく、シックな色みの書架や木箱を利用した個性的な本箱、カフェカウンター、落ち着いた灯の吊り下げライト、どこをとってもおしゃれ。おまけに、ハンモックはあるわ、カンヅメブースはあるわ、挙句の果てにビールが飲めるわとあって、私が知ってる本屋とはまるで違っていたからです。

書架に並んでいる本のセレクトは個性があって、珍しい本や、地元にちなんだものもふんだんに揃っていて、とことん好奇心を刺激してきます。

本好きも本とは距離のある方も引き込もうとしている、これぁ本屋が本気出してきた! と内心震えました。

八戸ブックセンターさんができた2016年といえば、私はデビューして2年目。自分自身、作家と思っていない時期です。今も、名前の頭に「作家」とつけて紹介されると、決まりが悪くなります。私の正体はキーボードで文字を打てるチンパンジーなのに、作家なんていってもらっちゃってどうもすみません、と。

しかしながら、考えてみれば、何かを作っているならみんな作家なんですもんね。

ということで、このセンターの画期的なところは、カンヅメブースなる執筆、創作活動用の個室が用意されているところだと思います。作家活動をバックアップしてくれる気満々。ここでなら集中して作品に取りかかれるでしょうし、ネタも降りてきやすそうです。5分書いては飽きて、1時間遊んだり昼寝したり、という習慣があるチンパンジー作家も利用させていただきたいです。

こうしたハード面だけでなく、ソフト面である企画力には脱帽です。

心躍る数々の企画に目を見張っていたのですが、まさか、拙作のイベントを開催していただけるとは夢にも思っていませんでした。しかも、RABラジオのパーソナリティの方とのトークと作中の料理再現。そのお料理を読者さんといただく、というものです。

読者さんとつないでいただいた私は、そりゃあ盆と正月がいっぺんに来たように感動しました。

つい先日ですと、拙作のモチーフとなった羊毛フェルトのワークショップとトークのイベント。これも読者さん参加型です。会場は実に和気あいあいとした雰囲気に包まれておりました。

来場者を軸に考えて、イベントを包括的に見て取り組んでらっしゃるんだなあ、と、その姿勢に感嘆しています。私も読者さんが読みやすいよう、独りよがりな話や文章にならんように気をつけようと、イベントのたびに自分に言い聞かせております。

このほかにも、県内で作家活動をされている高瀬乃一先生や、八戸コミュニティFMラジオBeFMさんとのご縁をくださったり、広く拙作を知ってもらうチャンスをいただいたりしております。

心からお礼申し上げます。

さらに調子に乗ってお願いできるのであれば、作家さんたちの「作品ができるまで」的なテーマの企画をしてくださったら、何と嬉しいことか。勇んで拝聴しに行きます。

作家と読者、また、人と本をつなぐ役割だけでなく、本やイベントを通じて新たな視点や気づきを与えてくださる八戸ブックセンター。

このセンター、これからも目が離せません。

御センターのますますのご繁栄とご発展をお祈り申し上げます。

髙森美由紀　miyuki takamori

小説家

パワープッシュ作品『羊毛フェルトの比重』（2022）など

1980年青森県出身（三戸町在住）。2014年『いっしょにアんべ』（フレーベル館）で児童書デビュー、『ジャパン・ディグニティ』（産業編集センター）で一般書デビュー。主な作品に『ふたりのえびす』（フレーベル館）『羊毛フェルトの比重』（産業編集センター）など。